

空間と存在

——ハイデッガーを手掛りとして——

吉本浩和

I <空間と存在>への問い（空間問題の水準と方向への問い）

1（問題の開陳）ハイデッガーの所論を手掛りとして<空間とは何か>という問題に一定の見通しを与えることが本稿の目的である。彼によれば空間問題の理解のために決定的なことは、「空間の存在への問いを、偶然持ち合わせている、おまけに大抵は粗雑な存在概念の狭さから開放し、空間の存在の問題性を現象自身と様々な現象的な空間性に注目しながら存在一般の可能性の解明の方向へと齎らす」（„SEIN UND ZEIT“, 16 Aufl. NIEMEYER, S. 113, 以下SZと略）ことである。我々はかかる空間問題の特徴付け自身をその水準と方向とに関して問題にすることから始めたい。a, 水準について。何故空間の存在が問われる際に存在一般の次元にまで遡って問題にされねばならぬのか。b, 方向について。その際如何なる存在概念から開放され、如何なる現象に注目して、如何なる方向へと進むのか。これらの問題を本章では論じたい。

2（問題の否定的特徴付け）そのために、我々が何となく最も「実在的」な空間と考える自然科学的空間概念、及びその立脚する自然科学的存在概念を検討したい。

2-1（現代に於る空間についての有力な先入観としての自然科学的空間概念の概観）ハイデッガーによれば自然科学的空間概念は或る抽象化の所産であり、その抽象性の度合いに応じて次の様に分類される（„VORTRÄGE UND AUFSÄTZE“, NESKE, S. 155-156, 以下VAと略）。抽象度の低い順から列挙する。まず spatium としての空間。これは「位置」と「位置」との間の計測される隔りとしての空間。「あいだの空間」（Zwischenraum）とも言い換えられている。次に extensio としての空間。spatium としての空間から、広がり縦横高さに関して取り挙げられ=抽象化

され、三次元の純粋な多様体として表象される。これはもはや「隔たり」Abständeによっては規定されず、従って spatium ではなく「延長」(Ausdehnung)である。最後に更にこれに抽象化が加わったものが分析的・代数的関係としての空間。これは「任意の多次元を持つ多様体の純粋に数学的な構成」の可能性である。以下の議論の伏線も兼ねてこの様な空間の抽象性を次の三点から特徴付けておく。

a (科学的空間概念と物について) 空間内の物が具体的に何であるかということとそれが空間内の何処に在るかということとは無関係である。その意味でこの空間は抽象的である。b (科学的空間概念と世界について) aとも関係しているのだが、この空間概念に於ては存在領域の固有な質というものが抽象されている。なんらかの意味で数量的に表現可能な世界以外の、具体的世界が抽象されている。「同形的で、如くなる可能な箇所に於ても際立ってはおらず、あらゆる方向に関して等価値で、しかし感性的に知覚不可能な」(„DIE KUNST UND DER RAUM“, ERKER, S. 6, 以下 KR と略) 数学的自然という一元的な存在領域以外にはこの空間概念は妥当しない。その意味でこの空間は抽象的である。c (科学的空間概念と人間) aとbとから既に示唆されるが、この空間概念に於ては人間の具体的な在り方が次の意味で抽象されている。この空間の中で人間がその都度具体的に如何に在るかということとその空間自体が如何に在るかということとは無関係である。この空間は、対象化された、非人称的な空間である。その意味でこの空間は抽象的である。

2-2 (<そのリアリティーの立脚する自然科学的存在概念>と<自然科学的存在概念が立脚する今日に於る我々と存在者との関わりのリアリティー>) 科学的空間概念が、以上の様な抽象性にもかかわらず、今日に生きる我々にとって度し難いリアリティーを持っているのは、「計測的に確定可能な在り方で示され、情報の体系として用立てられるもの」(VA30)としての自然や「物質的に、純粋な空間-時間-秩序の中で運動する質点 (Massenpunkt) 乃至それに対応する秩序の連関」(„DIE FRAGE NACH DEM DING“, GESAMTAUSGABE, BAND 41, S. 50, 以下FD)としての物といった、自然科学的な存在理解がリアルなものとして妥当しているからであり、更にその存在理解のリアリティーの背景には「最小限の消費で最大限の利用」をもくろみ「自然エネルギーを徴発する」(VA23)ということに結局行き着く様な、とめどなく「用立てる」(Bestellen) という仕方での存在者との関わり方が現在最もリアリティーを持っているということが存する。彼は空間のこの様な自然科学的な把握を

「空間の技術的一科学的征服」(KR6)とも呼ぶ。かくして自然科学的空間理解の根底には自然科学的存在理解があり、更にその存在理解のリアリティーの根底には、存在者との、現代に於てリアリティーを持つ関わり方が存する。空間と存在とはこの様に連関する。さて、「物理学的一技術的に企投された空間・・・が唯一の空間として妥当するのであろうか」とか「芸術的な空間、日常的な行為と交渉の空間といった、他の仕方では構造化された空間は客観的宇宙的な空間の単なる主観的に条件付けられた前形式、バリエーションにすぎぬのか」(KR6)とかいう問いをハイデッガーは立てるのだが、この場合、同時に自然科学的存在規定とは異なった存在規定が問題となり、技術的な「用立て」とは異なった仕方での存在者との関わりが問題となろう。空間を問題にする際に存在が同時に問題とならねばならぬ。空間は存在論的な水準で問題となる。

2-3(問題の否定的特徴付け)以上から我々は、<自然科学が自覚的に、そして現代を生きる我々が漠然とした仕方では前提する存在者、存在領域ではあらぬ存在者、存在領域に於て、抽象化されていない空間は如何にあるか>という問い方によって、存在論的に問題化されるべき空間問題の方向を否定的に規定したい。

3(実質的な問題提起) 既述の科学的空間概念の抽象性の三つの観点から更にこの問題を分節化することによって、否定的に定式化された空間問題に実質を与えることができる。つまり如何なる現象に注目して、如何なる方向に向かって、如何なるアプローチによって空間が問題化されるかが、形式的にはあるが示される。ここでは先に挙げられたのとは逆の順序で挙げる。

3-1(問題の分節化) a(人間と空間の問題) 空間が如何に在るかということと人間がその都度具体的に如何に在るかということとは切り離すことができるのか。もし基本的に分離していないとすれば、その際そもそもそういう人間とは如何なる存在であるのかという人間存在の問題が同時に問われる。b(存在領域と空間の問題) 等質的数量的な数学的自然とは異なる、その様な抽象化を蒙る以前の、人間が具体的に生きつつある場面での空間性というもの問題になる。その様な場面では等質的数量的ではなく質的に構造化された空間というものが生きられているのではあるまいか。空間の内実が質的に構造化されているのみならず、異なる質の様々な空間というもの生きられているのではないか。c(存在者と空間の問題) かく多様に生きられた空間に於て、空間内の物が<何であるか>ということとそれが<何処に在るか>という

こととは分離できるか。〈何処に〉がそこにある存在者の〈何が〉を規定したり、或いはその〈何処に〉と〈何が〉とが不可分に一致している様な存在者が、空間区分の分岐点＝連結点たる機能を持ち、従ってかかる物が空間を開くという空間のダイナミックな生きられ方はないのか。

3-2 (実質的問題提起) 以上から、自然科学によって抽象化された空間とは異なる、生の多様で具体的な空間性を存在論的に解明するという水準と方向を持った問題として空間問題は実質的に特徴付けられる。以下ではそれに一応の解答が与えられる。

3-3 (その方法) かく特徴付けられた問題に相応しいアプローチを、a、〈空間＝自然科学的空間〉とか〈存在＝自然科学的存在〉とかいった先入観を排除(エポケー)し、b、具体的な場面での空間経験を記述しつつ、c、しかもその経験の偶然的な属性ではなくて本質的な構造を抽出する、と一応特徴付けておく。実際にハイデッガーがかかる方法を用いているということは以下に具体的に見られよう。以上の問題提起を踏まえた上で、彼の空間論の内容を、(Ⅱ)〈道具との交渉という日常的な場面での環境世界的空間性〉、(Ⅲ)〈根源的に人間が住まいするという場面での空間性〉という順で見たい。

Ⅱ 日常性に於る空間経験の構造

『存在と時間』でハイデッガーが解明した空間性は〈日常的に、道具との交渉によって開かれた環境世界に特有な空間性〉である。

1 (その内実) 前章で挙げた空間問題の三つの分節に従ってこれを見ていこう。

1-1 (空間と空間内の存在者との関係) 我々が日常的に関わる存在者は中性的な物体ではなく、「道具的存在者」である。ここでは彼は道具の道具たる限りでの空間性を明らかにせんとする。彼の所論を幾つかの空間契機(距離、方向、場所)との連関で整理しよう。まず道具と距離との関係。道具は我々と様々な「近さ」に於て出会われているが、その場合の近さは物理的な意味での「間隔の測定」によって確定できるものではなく、「目を配りつつ『勘定に入れる』操作や使用から規制される」(SZ 102)。道具との交渉に於て実際に妥当している距離は物理的な意味で遠いか近いかではなく、何かのための配慮と相関的に決定される。或る道具が近くに在るとは物理的

に近いということではなく、手ごろな所に在るということであり、しかも何かの目的のためにそうであるということである。次に道具と方向の関係。同様なことが道具の方向についても言える。道具の方向は物理的に決定できるものとは異なり、「配慮しつつ目を配るということ」が「道具をその方向に関して定める」(SZ102)。最後に道具と場所(Platz)の関係。以上の様に道具は一定の「方向付けられた近さ」(die ausgerichtete Nähe)に存するのだが、これが意味するのは「道具がどこかに物理的に存在してその位置(Stelle)を持つというだけのことではなく、道具として本質的に一定の場所に据え付けられ、納められ、組み立てられ、整頓されているということの意味する」(SZ102, 傍点引用者)。「道具として本質的に」というのは、もし配慮と相関的な「方向付けられた近さ」に於て在るという性格を取り去ったら道具はもはや道具ではなくなってしまうということである。道具のかかる空間性は道具にとって偶然的なものではなく道具の存在にとって必然的本質的である。道具で在るということとは配慮と相関的な一定の方向を配された近さに於て在るということである。道具の存在とその空間的な〈何処に〉とは不可分である。かかる〈何処に〉を彼は任意の空間的「位置」(Stelle)とは区別して、「場所」(Platz)という言葉で呼んでいる。「Platzとは、或る道具の帰属する一定のその都度の『そこ』『かしこ』である。」(SZ102)

1-2 (空間と存在領域との関係)「それぞれの場所(Platz)は、何々するために在るこの道具の場所として、環境的に手元に在る道具連関の中の互いに方向付けられた諸々の場所の全体から規定される。」(SZ102, 傍点引用者)更にその根底にはその内で一つの道具連関にひとまとまりの場所があてがわれる「所属領域」Wohin (SZ103)がある。かかる「可能な道具的帰属の所属領域」は「配慮しつつある交渉に於て目配りをしつつ予め目に収められている」(SZ102)のものであり、彼はこれを「辺り」(Gegend)と呼ぶ。「目を配りつつ意のままにできる(umsichtig verfügbar)道具全体性の中で、様々なPlatzを割り振りしたり、見付け出したりすることが可能になるためには、辺りといったものが予め発見されていなければならない。」(SZ103, 傍点引用者。この強調箇所については後にかかる在り方は異なった空間性が問題になるだろう)「方向(Richtung)と距離(Entferntheit)とによって・・・構成されたPlatzは既にGegendにむけてGegendの内部に定位されている。」(SZ103)

この存在領域は「観測的な空間測定によって確定され記載されるものではなく、「日常的な交渉の往来(Gänge und Wege)によって発見され、目配りに解釈」(SZ

103) されているものである。我々が「世界の中に在る」ということが、その様な往來を生き、目配りのに道具と交渉しつつ在ることであるならば、我々（＝彼が「現存在」と呼ぶ存在者）のかかる在り方にこそ環境世界的な空間の在り方は帰せられよう。「現存在自身がその世界内存在に関して空間的である故にのみ、道具と、その環境世界的空間に於て出会うことは存在的に可能である。」(SZ104) 現存在は如何なる意味で「空間的」であろうか。

1-3 (空間と人間との関係) 現存在が世界の「中に」あるとは、容器の中に物体があるということではなく、「世界の中で出会われる存在者と、配慮しつつ馴れ親しんで交渉する」(SZ104)ということの意味する。その様に出会われる存在者は差当っては道具という在り方をしており、上述の様に道具の空間性は私からの距離 (Entferntheit) と私から見た方向 (Richtung) とによって構成される Platz として特徴付けられる。その様な距離と方向とは、道具自体、世界自体に物理的に内在している様なものではなくてむしろその都度我々が繰り広げているものである。道具が、配慮的な距離や方向により規定される Platz に於て出会うということは、裏返して言えば我々が配慮的に道具と距離を取りつつ方向付けつつ交渉していることを意味する。「距離を取る」ということと「方向付ける」ということについてそれぞれ見ていこう。

「距離を取る」(Entfernung) ことについて。彼によればこの言葉 Entfernung は既に繰り広げられてしまっているものとしての、私の身体からの「距離」(Entferntheit) とかましてや物と物との「隔たり」(Abstand) とかを意味するのではなく、それを通して初めてその様な距離が「発見」される様な「能動的、他動詞的」に距離を取りつつあることであるとされる (SZ105)。さて彼によれば日常世界に於る道具的なものとの関わりは、差当って大抵は「調達するとか、整備しておくとか、手元にそなえて所持する」とかいった様に何らかの意味で「近みに取り寄せること」であり、存在者を純粋に認識的に発見するといった場合でも同様の「近付け」(Näherung) という性格を持ち、従って「距離を取る」ことは、「或る物の遠さ既に距離」を何らかの意味で「消滅させる」ことを意味する (SZ105)。我々なりに砕いて言えば、例えば遠くにあるものに目をやるということは、そのものを視野の中にもたらし、目のあたりにすることであり、そういう意味で遠さを消滅させるということである。一般に何かを把握し、それと出会い、それに関わるということは、把握され出われ関わられたものとの距離を何らかの意味で消滅させるということである。「現存在は本質的に距離を取

り（除き）つつあり、その都度の存在者を近みに於て出会わせる様なまさしくそういう存在者である。」(SZ105) 現存在で<在る>ということは、存在者と出会いつつ<在る>ということであり、これは entfernen しつつ<在る>ということを含意する。かくして「現存在には近さへの本質的な傾向が存している。」(SZ105, これとは違った空間性が後に問題になるだろう)

以上の様な意味での Entfernung（距離を取る＝近付ける）に於て私と物との間の Entferntheit（距離）が発見され、然るのちに物と物との Abstand（隔たり）が認められるようになると彼は言う (SZ105)。しかもこの Entfernung は配慮的交渉という性格を持っており、だからこそこれによって発見された Entferntheit に於て、例えば『客観的』には長い道が近道で、『客観的』には遙かに短い道が、例えば『難儀な道』であるために、むしろ限りなく遠く思われる、ということがあり得る。」(SZ106)

「方向付け」(Ausrichtung) については上述より容易に理解できるので纏言を要さない。道具は固有の Platz を有し、Platz は Entferntheit と私から見た「方向」(Richtung) とによって規定されており、Entferntheit は Entfernung という我々の関わり方によって発見されるのであったのに対し、Richtung を発見する能動的他動詞的な我々の、物たちへの関わり方を彼は「方向付け」(Ausrichtung) と呼ぶ。言うまでもなく方向付けも我々の目的に規制される配慮に連関するのであり、物理的に確定できる方向には環元できぬ。

かくして「辺り」(Gegend) との関係も明らかとなる。「近付け (=Entfernung) の各々は予め既に辺りへの一つの方向 (Richtung) を受け取っており、その辺りから、距離を取られたものが近付いてきてその Platz に関して見出される様になる。」(SZ108) 結局 Gegend とは、我々によって「方向付けられ距離を取られた、即ち Platz 的に出会うことのできる手元的にある道具連関が帰属する領域」であり、これに於て「予め空間が発見されて」いる (SZ110)。ここで<空間と存在>は如何に連関しているか。

<我々が世界の中に在る>とは、差当って<道具と出会いつつ在る>ということであり、それは<道具に Gegend の中でふさわしい Platz に於て関わる>ことを含意し、そのためにはそれに先立って予め Gegend を我々は開いているのでなければならぬ。この Gegend 自体は、最終的に我々の自己の目的を焦点とする手段目的連関として構造化されている。かくして Platz-Gegend によって特徴付けられる空間性は、自

分のために何かをくもくろんで=企投して>, それを焦点としつつ我々のまわりに道具連関を<距離を取りつつ方向付る>という仕方で繰り広げつつ在るといふ我々の在り方(実存)に帰着する。この様に空間と我々の存在とは切っても切り離せない関係にある。実存という存在概念がリアリティーを持つ場合に初めて以上で特徴付けられた空間性も真に意味を持つものとなる。

2(自然科学的空間に対する実存的な空間の根原性)とここで彼によれば自然科学的な空間性は実存的な空間性を次の様にして中性化した所産である。まず差当ってこの空間性は道具との関わりに於てともに現前してはいるが、ことさらに注目されているわけではない。が、例えば家屋の建築といった目的のために測量ということがなされる場面で主題的になり、更にそういう目的を離れてこの様な主題化がそれだけで純粋に追求されるようになり(「空間的諸形態の純粹形態論」→「位置解析」→「純粋に計量的な空間論」), かくして「純粹で同質的な空間」(SZ112)が見い出され展開される。

かく抽象化される以前の環境世界的な空間性は次の様な点で自然科学的空間の抽象性を免れている。即ち a, 空間内の物の<何が>とその<何処に>とが分離されない。道具は然るべき場所に帰属する。b, 空間領域は、数量的形式的な関係ではなく質的(意味的価値的)に構造化されている。自己の目的を中心とした手段-目的的な機能連関。c, 空間から空間内に在る人間の具体的な在り方が捨象されていない。自ら意味付け、配備した世界の中で道具と関わりつつ在るといふ我々の在り方と相関的な空間。

以上の様に特徴付けられる空間は確かに自然科学的空間とは別のリアリティーを有した独自のものである。しかも上述の様に実存的な空間性は自然科学的なそれを単純に排除しそれと対立する様なものではなく、むしろ後者は前者の或る種の欠性態として位置付けることができる。その意味で後者より前者の方が根源的だと言えよう。

3(実存的な空間論の非根源性、即ちその抽象性の示唆)しかし、では実存的な空間性が最も根源的であるのか。我々の具体的な空間経験はこれに尽きるのか。この空間性もまた程度の差こそあれ自然科学的な空間性がそうであった様に一つ特定の制限された場面(道具との交渉)での空間性にすぎず、従って或る意味で抽象的なものではないか。しかも自然科学的空間が完全に「征服され」(KR6) きた空間であるのと同様に、程度の差こそあれ実存的な空間経験も空間支配という傾向を持ったものとは言えないか。

III 根源的に住まうということに於る空間経験の構造

ハイデッガーは論文『建てる、住まう、思惟する』で一層具体的で根源的な空間性を明らかにするのだが、その議論を見やすくするために、簡単な方向付けをまずしておこう。

1 (根源的空間性の構造の形式的示唆) 道具との関わりに於る空間性に於ては「近付け」(手中にし、眼前に据えるといった)が肝要であった。この様ないわば意のままにできる空間の経験によっては十分捉えられない或る種の空間のリアリティーはないだろうか。

1-1 (「此処」の「この物」のリアリティー) 既に手段目的的に構造化され勝手に知られた領域 (Gegend) を生きるのではなく、むしろかかる領域が初めて開かれつつある途上にある様な場合、その領域の中の物の〈何処に〉は全体の中に占める Platz ではなく (というもこの全体は未だ完成しておらず、馴染まれておらず、勝手に分からないから、全体の中で Platz を確定できない)、むしろ逆にこの物の〈何処に〉が領域を開く焦点、結節点といった機能を持つ様な具合に出会われることが考えられよう。このことは次の様に考えれば得心がいこう。即ち数学の座標空間に於てさえ、まず原点や座標軸が定められて初めて各点の座標や各象限が確定され、位置付けられるのであり、その意味で原点、座標軸といった空間の分岐=接合を司る特異的な箇所が空間を開くと言える。もっとも数学の場合はかかる箇所は任意の箇所に設定できるから、かかる箇所は他と交換不可能な質的な中心性は持たぬ。しかるに様々な質や意味を胎んだ存在者との具体的な関わりの中で、我々が空間を質的意味的にその都度初めて種々の領域に分ち、取り纏める場合に、その空間の中へ我々が住み込むにあたって、我々が自らをそこへと初めて繋ぎ止め定着させる足掛かりとなる存在者が我々にとってその空間を取り纏める中心となる。その中心は、空間経験がそこから始まりそこに向けて収束していく先端である。それは質的意味的な内実を持った、他のものと交換不能な此処のこの物であって任意の抽象的位置ではない。その物の〈何であるか〉と〈何処にあるか〉とは不可分であるのみならず、その〈何処に=何が〉が空間を集摂する原点的機能を持つ。我々は、後述のハイデッガーの Ort (=「場所」「先端」が語源) をかかる意味での「要所」(肝要な所) と解したい。

1-2 (自然のリアリティー) 企投によって繰り広げられた手段目的連関に帰着する空間性ではなく、それには還元できず、むしろそこに生れ着きそれに支えられて我々の生が営まれる自然といった領域のリアリティーが実存的空間性によっては十分に捉えられていない。それは我々がその上に住む大地であり、その下に住む天空といった自然である。自然科学が問題にする様な物質的な組成(天空は空気であるといった)とか幾可学的な位置(大地と天空との位置関係)とかへと平板化される以前の、しかも道具連関の編目に組み込まれて尽くすことのできない領域のリアリティー。

1-3 (死すべき者という人間の具体的在り方のリアリティー) 我々が我がもの顔に振る舞うことのできる、既に構造化され馴染まれた、勝って知ったる Gegend の中で、全体連関の方から規定される Platz 於て、一方的に物を思うがままに扱う、——畢竟「近付け」とはかかる動向を表現したものであろう——かかる場面での空間経験ではなく、死に曝されたはかない存在者である我々が、まさにかかる者であることを身に染みつつ、聖なるものや神々を迎える空間を開いていくといった経験のリアリティー。人間を動物から際立たせる可死性の自覚は、人間の生の具体的全体的な在り方を捉える上で捨象してはならない。死すべき人間がかかる者として開く固有の空間性(例えば宗教的空間)は、いわば世俗的な空間性の分析では十分に捉えられない。いや、現世での我々の生の場面に於て空間経験には自然との関わりの方のみならず何か超自然的なもの、神々しきものへの志向の次元が(今日リアルに生きられていないにせよ)含まれることは事実であろう。

以上の三点が一つになって生の全体的で豊かな空間が開かれる様に思われる。それらが如何に結びついているかをハイデッガーを手掛りとして明らかにしよう。

2 (具体例に即した紹介) この様な空間性を、『建てる、住まう、思惟する』での「軽やかに力強く流れの上に弧をえがいている」橋を巡っての具体的記述から示そう。

2-1 (自然と Ort たる橋) 彼の指摘する様に、この橋が在ることによって川のこちらやあちらの一定の空間部分は、渡るべき「川岸」と言う意味を持ったものとして初めて画限され出会われる(幾何学的な任意の空間とか物理学的な中性的物質としてではなく)。そして川岸がかく川岸として意味付けられることにより同時にこちらとあちらの川岸の背後の一定の広がり方が川の流れとの一定の連関性に齎される。かくして「橋は流れと岸と土地を相互的な近隣性へと齎らす。」(VA152) その意味で「橋は大地(Erde)を流れの周りの一定として取り纏める。」(VA152) さて橋が建て

られる以前にも大地は即自的に流れの周りに在ったと言われるかもしれぬ。それが自然科学の意味で「在った」ということなら然り。例えば川岸の在る幾可学的な位置は橋が在ろうがなからうが変化せず、川岸を構成する物質的組成についても同様である。だが橋が在る以前には、橋を焦点として、川の周りの大地を一定の連関で区分し結びつけるということはなかったのである。

又橋は雷雨や雪解けとかによる洪水に耐えられるよう、天空の気象を勘案して建てられている。橋に於て川の流れと「天空」(Himmel)とが一定の連関性の中に齎らされる。

2-2 (橋と人間と自然) 同時に橋は我々が土地から土地へとむかっていく道を我々に与えるとハイデッガーは言う。思うに道を開くとは、大地の上に天空の下に我々が定着し住まうということの要である。橋の建設によって、それをいわば接点として我々は大地や天空と一定の仕方と触れ合うといえよう。幾何学者、理論物理学者にとっては大地であろうが、天空であろうが無差別であり、地質学者にとっても物性といったもののみが問題である。その中に住むという我々の在り方に対して初めて大地や天空はその上でその下で住まれる所という意味を持ったものとして初めて関わられる。しかも住まうことは任意の空間地点としての大地の上に天空の下に任意の仕方と在るということではなく、然るべき地点に然るべき物(橋)を然るべく建てるという在り方である。

ところでこの様な橋は或る意味では確かに道具という性格も又持つ。「計算的で可能な限り高速な遠距離交通の道路網の中にアウトバーンの橋ははめこまれている。」(VA153) この橋の開く空間性が道具的技術的な在り方をも排除せずむしろ或る意味で包括するという点にこそ、この空間性の豊かさを我々は認める。この橋は様々な空間領域、空間次元の交差する点であり、次の様な超越的次元とも結びついている。

2-3 (橋と死すべき者たる人間と超自然的なもの)「橋の聖者の像」(Figur des Brückenheiligen (VA153) などが建てられている様な場合にとりわけ可視化されるが、他の岸(彼岸)に向う死すべき人間は「常に既に最後の橋への途上にあつて、根本的に、日常的なもの、災いを乗り越え、神的なものの健やかさの前にいたることを望む」(VA153)。「橋は神的なものへの跨ぎ越え行きとして(人間と神的なものとは——引用者註)結びつける。」(VA153) 確かに昨今橋が神的な次元への通路としてリアルに意味付けされることはなく、ハイデッガーもそれを認めている。が、特定の神

とは言わないにせよ、何か神々しきものの有無を問題にしつつ住まうということが我々の具体的な生を特徴付ける一つの本質的な契機である（動物は無神論者たることさえできぬ）とは言えよう。可死性の自覚が人間の本質的特徴である限り、生死との連関での、人間と物との関わりを捨象してしまうのは生の全体性具体性を見ぬ抽象的な態度であろう。

3（物と方域と空間）橋を巡って以上のように記述的に摘出された、物についての経験の構造から空間に関してどのようなことが言えるか。

3-1（空間との関係）「橋はそれなりの仕方であらば、大地、天空、神的なもの、死すべき者を自らに於て摂り集める。」（VA153）自然（大地、天空）、超自然的なもの（神的なもの）、自然の中に生れ着き自然を越えたものを求める者（死すべきもの）を一定の連関性に於て分岐させ、接合させる交錯点という性格を有するものとして我々は橋と関わる。ハイデッガーはこの四者からなる世界を「方域」（Geviert）と呼び、かかる集摂的な存在者を Ding（＝物。これは語源的に「集摂」を意味する）と呼ぶ。この世界が必ず四者からなるかどうかは問題だが、我々が物を寄る辺として世界をその都度開く際に、その物が、世界の意味的価値的な分岐＝接合点としての原点的機能を持つという形式的なことは少くとも言えよう。さて、以下の様に Ding たる橋は先に示唆された様な Ort として空間を開く。

「橋は方域に或る立地（Stätte）を許す（verstatten）。それ自体が Ort である様なもののみが Stätte を einräumen——この言葉は〈容れ、明け渡し、所定の場所におく〉という仕方であらば空間（Raum）を空ける〉ということの意味する、引用者註——することができる。橋は後になって初めて Ort に向けて存在するのではなく、橋自身によって Ort が初めて生成する。……この Stätt から諸々の Platz や Weg（道）が規定され、これらを通して空間が開けられる（einräumen）。」（VA154）「空けられたものは、その都度 Ort 即ち橋といった類の Ding によって容れられ接合される、つまり集摂される。従って諸空間はその本質を Ort から受け取るのであって、『唯一』の空間（物理学の言う様な——訳者註）から受け取るのではない。」（VA155）

方域的空間では一方的な「近付け」は支配しない。確かに Ding は近くに在るが、その近さによって例えば神的なものへの神的なものとしての限りでの連関が開かれる場合に、神的なものは眼前に据えられた手中にされるのではなく、むしろ逆にまさに遙かなものとして仰がれる。「近さは遠さを……遠さとして近寄せる。近さは遠さ

を保つ。」(VA176)

3-2 (その根源性) 確かに方域的空間性は、存在の自然科学的乃至実存的な理解に於てはリアリティーを持たぬ。何か主観的で曖昧な感じがする。が、この空間性は主観に還元できぬ大地や天空や Ding との相互関係の場面で開かれる故に、〈抽象的な数学的存在としての空間〉や〈自己の目的から構造化される実存的空間〉より、或る意味では遙かに客観的である。又大地—天空という以外の区分も可能で、Ding も橋たらずともよいという曖昧さも、むしろ具体的な生の本質的な契機たる豊かな流動性から来ていると言えまいか。さもなくば橋は物神のごときものと化することになる。しかも既述の如く方域的空間性は実存的空間性を排除せずむしろ包含し、しかもこれも既述の如く実存的空間性は自然科学的空間性を或る意味で包含している。従って方域的空間性が最も根源的と言える。故にこの空間性こそが様々な次元を胎んだ生の豊かな空間性である。かくて冒頭で特徴付けられた水準と方向とを持つ空間問題に一応答えられた。

3-3 (現代に於るその非現実性) だが方域的空間性の持つ非現実感否めぬ。この空間性がリアリティーを持つのは Ding や方域が、かかるものとして我々にリアルに生きられている場合のみであり、もしかかる空間性が今日に於てリアリティーを持たぬとすれば、それはまさに今日かかる Ding や方域が——殊更に「Ort を求め造形する」(KR12) 造形芸術の場面は別にして——リアリティーをもって実際に生きられてはいないということであり、これは今日の科学技術の跋扈と表裏一体の関係にある。根源的空間性の非現実性＝今日的現実の非根源性。実は、ハイデッガーの言う如く、科学技術の支配は、今日に於る我々の、存在者との関わり方から規定された、任意にエポケーできない現在の「歴運」であり、そしてそれは近代科学、近代形而上学を経て古代ギリシアの「存在忘却」に淵源するならば、生の全体的で豊かな空間性を真に現実的に経験するためには、ギリシアでの「第一の源初」を清算して、「抜一本」(Ab-grund) 的に、「別の源初」へと「跳躍」的に「転じ」、現実自体を転変させることが待たれることになろう。(Vgl. „BEITRÄGE ZUR PHILOSOPHIE, GESAMT-AUSGABE, Bd 65, S. 371-388)

〔哲学 博士課程〕

Raum und Sein

—Anhand Heideggers Abhandlungen—

Hirokazu YOSHIMOTO

Anhand Heideggers Abhandlungen behandelt der vorliegende Aufsatz die Frage, was ist der Raum? Der naturwissenschaftlich verstandene Raum als quantitative Relation, der heutzutage als der einzig wahre Raum gelten soll, ist in Wahrheit dasjenige Abgezogene, das sich aus dem konkret und mannigfältig gelebten Raum abziehen läßt. Diese Abstraktheit besteht darin, daß in dem naturwissenschaftlich angesetzten Raum man von der jeweiligen und konkreten Weise des in dem Raum Seienden (Ding und Mensch) abstrahiert. Nun wollen wir den noch nicht abgezogenen aber konkret gelebten Raum erörtern. Erstens behandeln wir den in *Sein und Zeit* erörterte Raum, der der alltäglichen Umwelt eignet und sich durch unseren Umgang mit Zeug qualitativ bzw. wertmäßig strukturiert. Er hat das perspektivische Gefüge, das sich um unseren Zweck herum zusammensetzt. Zweitens behandeln wir den in *Bauen Wohnen Denken* erörterten ursprünglichen Raum. Wenn man ursprünglich siedelt und wohnt, dann muß man sich je und je auf ein bestimmtes Ding stützen. Dann unterscheidet und verbindet qualitativ bzw. wertmäßig dieses Ding als Ausgangs-Scheidepunkt unseres Raums verschiedene Gebiete bzw. Dimensionen einschließlich des Menschen selbst. In dieser Weise öffnet ein Ding als entscheidender Ort den ursprünglich gelebten Raum.